

コンピュータ文が提供する談話スキーマとその習得 —日本語学習者と日本語母語話者の日本語接触場面から—

遠山 千佳*

要旨

本研究では「立命館日本語学習者会話コーパス」を用いて、留学生と日本人学生の日本語接触場面におけるコンピュータ文の型と、コンピュータ文が提供する談話スキーマの分析を試みた。その結果、日常会話では、日本語初級で導入される「N1 は N2 です」よりも、「N1 は N2」という、コンピュータ（です/だ）を用いず名詞で終わる型によって、情報伝達中心のコミュニケーションパターンが留学生にも日本人学生にも多用されていることが明らかになった。また、その機能として、新しいトピック情報を提示するきっかけづくりが行われることが学習者に多く見られたが、会話を重ねることにより、きっかけづくりをした話し手にターンを積極的に譲ることが見られたペアもあった。その他、引用や例示を用いた客観性、間接性を表わす文末表現は、日本語母語話者だけに見られたが、今後データを継続して採録することにより、日本語母語話者との接触によって学習者にも産出がみられるようになるかどうか、若者文化との関連からも観察を続けたい。

* 立命館大学 言語教育情報研究科 准教授

1. はじめに

我々が母語以外の言語でコミュニケーションをする際に、語彙の意味や文法知識を組み合わせ発話しようとしても何か不安が生じることがある。その1つは、1つの文でさえ、相互行為上で使用するとすると、辞書的な意味以上の談話機能が生じ、それがぶっきらぼうであたったり、親しすぎたりするなど、想定しない感情が伝わる可能性への不安である。自分が話し手に当たる場合、聞き手はどのように自分の発話を受け止めているのか、また自分が聞き手の場合、文の意味は理解できても、相手が自分にどのような反応を期待しているのか、それが理解できないとやりとりが難しく感じられる。つまり、コミュニケーションにおいて伝達されているのは、情報だけではなく、情意も同時に伝えられるのである。しかし人間関係にも関わる情意の伝達は相互行為において生じるものであり、単独の項目で編纂される辞書や文法書に明示的に説明されることは少ない。

日本語を非母語話者が第二言語として使用する場合、どのような点にコミュニケーション上の不安を感じるのだろうか。日本語教師を志望する超級レベルの日本語学習者が、自分が受けてきた日本語教育を振り返り、「初級の初めの段階から文末の表現を勉強したかった、中級や上級でいくら説明されてもピンとこない、来日当初にどのような文末表現を使うかにとまどった、これから日本語を勉強する人のためには初級から文末表現を勉強するテキストが必要だ」というのをよく耳にする。日本語は発話態度が文末に現れるが、文末には機能語がくることも多く、「内容語に比べて機能語は、その表わす意味が抽象的であるため、それが談話の中で果たしている機能を観察することによってはじめてその本質が理解できることが多い(堀江 2004:253)」と言われているように、機能語が第二言語学習者にとって文末の表現の選択を難しいと感じさせる要因の1つであると考えられる。

これまで、態度を表す発話行為としては、依頼、謝罪、断りなどが対照研究として研究されてきたが、日常の会話が全てこのような特定の発話行為とは限らない。人間関係構築上、重要ではあるが、むしろ特殊な場合ともいえる。本研究では、初級の最初から導入され、日常的にも使用されることの多い、「N1はN2だ」というコピュラ文を取り上げ、日本語学習者と日本語母語話者の相互行為の中で、この一見シンプルな構文がどのように発話され、談話においてどのように機能し、どのようにやりとりが続行されるかを分析する。その上で、「N1はN2だ」が日本語教育で導入される多くの場合に、同時に導入されることのない発話態度(情意の伝達)や予測される談話スキーマについて考察し、日本語教育への示唆をえることを目的とする。

2. 先行研究

2.1 発話行為としてのコピュラ文

「N1はN2だ」というコピュラ文は、「名詞+助詞(は)+名詞+助動詞(だ)」という構造をしている。この成分のうち、助詞「は」と助動詞「だ」は機能語である。助詞「は」は

題目を標示する機能をもつが、三上(2002)は、話し手は、題目(トピック) 解説(コメント)の解説部分を「確信している」としている。また、メイナード(2000)は、コピュラの「だ」を主体が判断を下す発話行為の一種として捉え、「確信や強調の〈情的態度表明〉の機能を果たす(p.198)」、つまり断定の意図を「はっきり主張したいとき使う(p.199)」としている。また、三尾(2003)も、「だ」は判断を表す文中に用いられ、断定作用を持つとし、話し手の発話が事実に合致しているという主張であるとしている。以上のように、コピュラ文は話し手自身が確信している内容を断定的な主張として強調的に述べるという作用をもつことになる。

話し手が聞き手に対して自分の判断を確固たるものとして主張するつもりであれば、コピュラ文をそのまま使用することは可能である。しかし、文脈や対人関係上、断定に猶予を持たせたい場合は、主張しつつも、相手に押し付けない言語的配慮が必要となる。したがって、「N1はN2だ」というシンプルな構文においても、話し手の主張する「情報」と、情報を伝える発話態度としての「情意」の両者を伝えなければならないことになる。

メイナードは、「だ」には2つの作用があり、命題の情報に関して強調される場合は、情報伝達機能が中心となり、主体の発話行為に関して強調される場合は、情意交渉への機能に重きが置かれるとしている。つまり、話し手と聞き手の事態認知の仕方により、コピュラ文の情報と情意は、ルビンの盃(図1)のような図地の関係を取り、相互行為の文脈に即して、情報が前景化されたり情意が前景化されたりすると考えられる。話し手と聞き手は、このような情報と情意の見え方(「見え」)を共有しながら、コミュニケーションを進めていくと想定される。では、話し手と聞き手はどのように「見え」を共有し、相互行為を続けていくのだろうか。また、どのように会話が続けていくか予測は可能なのだろうか。

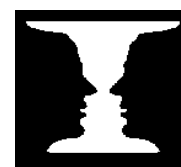


図1 ルビンの盃

話し手は聞き手の反応のパターンをいくつか予測しながら話し、それに対して聞き手はどのように反応すべきか判断しながらターンを受け継いでいくと考えられる。話し手と聞き手は、言語化されない部分も含めてその場の文脈を分析しながら談話を構築していく。本多(2005)は「環境の中のものが知覚者に提供する行為の可能性」を「アフォーダンス¹⁾」としている。コミュニケーションにおいては文脈を構成する構文は発話環境と考えられ、知覚者である聞き手に行為の可能性を示すと考えられる。また、河野(2006)は、「我々がどのように行動できるか、どのように行動すべきかに関わる環境の特性」を「アフォーダンス」としている。アフォーダンス理論は言語において文レベルでは研究されてきている(本多 2005 など)が、談話レベルではほとんど分析されていない。談話レベルでは、話し手と聞き手という複数の参加者が関わっており、「社会的アフォーダンス(本多)」が行われていると考えられる。

本研究ではコピュラ文の環境の特性を発話態度を示す文末表現を含めたコピュラ文の構

造とし、そのあり方がどのように聞き手の反応の仕方をアフォードしているのかを談話レベルで分析したい。具体的には、話し手の発話で使用されたコンピュータ文に対して、聞き手がどのように反応し、やりとりが続くかを分析することにより、コンピュータ文の談話機能を抽出する。

2.2 コンピュータ文の談話機能

砂川(2005:129)は、コンピュータ文の情報面から談話機能について、「前提を踏まえて新しい情報を提示することから、談話の主題を導入する機能を果たすことが多い」、典型以外では「状況的枠組みの提示や談話の結びの機能を果たす」ことも少なくないとしているⁱⁱ。ただし砂川の分析は、相互行為ではなくテキストを分析対象にしているため、読み手に何をアフォードし、読み手がどのように反応することを想定しているかについては分析されていない。また、「主題」という概念は、言語によってさまざまであり、それぞれの言語でも定義しにくいものである(野田 2004、Odlin 1989、Myhill 1992)ため、日本語学習者への説明として「主題」という用語を使用しても、主題とは何かという問題が生じる。

日本語のコンピュータ文に構造が似ている英語の構文に、‘What you need most is a good rest(Hopper, 2001)’のような疑似分裂文があるが、Hopper(2001)は、英語母語話者を対象に、疑似分裂文の自然会話における機能を分析し、これまで母語話者の内省分析によって「強調構文」とされてきた疑似分裂文の機能に対し、これから話すことに注目させたり、言葉を選択する場合の時間稼ぎや発話のターンを保持したりする機能が疑似分裂文にあると分析している。このことは英語母語話者の自然会話において、疑似分裂文が聞き手に聞き続けることをアフォードしていると考えられる。

遠山(2011 予定)は、海外でもドラマ化されるなど日本語学習者に人気が高いと考えられるコミック 3 種類(少年マンガ、少女マンガ、学園マンガ)の発話部分を対象に、日本語のコンピュータ文の文末表現とその後続く聞き手の反応の関係を分析し、助動詞「だ」の有無と終助詞がつくかどうかで 4 つの談話スキーマを抽出し、それぞれのコンピュータ文の型によって、情報が追加されたり、反論が起こったり、トピックが終了するなど、異なる聞き手の反応が予測できるのではないかとしている。

以上のように、コンピュータ文の談話における機能を分析した先行研究はいくらか存在するが、そのほとんどが母語話者の発話やテキストを対象にしており、学習者の発話を対象に談話機能やその習得を分析した研究は少ない。また本研究で対象とするコンピュータ文は初級の最初に導入される構文でありながら、話し手が確信している内容を断定的に主張するという機能や談話スキーマは、日本語学習用の教科書で明示的に示されているものはほとんどない。したがって学習者は実際のコミュニケーションを通して習得していくと考えられる。

日本語学習者がどのようにコンピュータ文を使用しているかを分析することは、日本語教育

において、いつ何を提示すればよいかのヒントとなりうる。また、日本語学習者と接触することの多い日本人学生の発話も同時に調査することにより、習得の要因となるインプットとの関係も明らかになり、同じく日本語教育へのヒントとなりうる。

3. 研究課題

以上のことから、本稿では、以下の研究課題を挙げる。

- (1) 日本語学習者と日本語母語話者は、それぞれどのようなタイプのコンピュータ文を産出するか。両者に違いはあるか。あるとしたらどのような違いか。
- (2) コンピュータ文の発話に対して、聞き手はどのように反応し、どのように相互行為を続行しているか。日本語学習者と日本語母語話者では違いがあるか。

4. 研究方法

4.1 データ

データとして「立命館日本語学習者会話コーパス(ver0.5.2)」を用いた。

本データは、2010年9月に立命館大学に短期留学生として来日した日本語学習者5名と、立命館大学の学部在籍する日本語母語話者の学生5名を対象に、2人1組のペアで行った会話の縦断的記録である。

表1、表2は、それぞれ日本語学習者と日本語母語話者の属性である。日本語レベルは立命館大学の短期留学生用の日本語クラスのレベルである。JLPTに合格している場合はそれを付した。ペアの組み合わせは、話者番号1&2、3&4、5&6、7&8、9&10である。

本データでは、これら5組のペアの会話を、約3週間ごとに記録している。第1回目の会話は、10月末から11月中旬にかけてである。今回使用したver0.5.2では2011年3月の段階で、4組による各5回ずつの会話データ、1組による4回の会話データが収録されている。1回の会話は約60分間行い、そのうち、10分目から40分目の30分間を文字化し、コーパス化してある。

表1 日本語学習者の属性

話者	出身国	母語	性別	日本語レベル	年齢
1	台湾 / カナダ	中国語	女	上級	21
3	韓国	韓国語	女	上級 / 2級	22
5	台湾 / カナダ	中国語	男	超級 / N1	23
7	韓国	韓国語	女	上級	20
9	中国	中国語	女	超級 / 1級	23

表 2 日本語母語話者の属性

話者	出身地	性別	年齢
2	東京都	男	19
4	愛知県	男	20
6	滋賀県	女	20
8	愛知県	女	22
10	愛知県	女	21

4.2 分析方法

データ中の全てのコピュラ文とそれを含む前後の文脈を分析対象とした。データは縦断的データであるが、データ採録の開始から日が浅いことと、対象者が比較的日本語レベルが高く、現段階で日本語にそれほど変化がみられないため、今回はデータ全体を1回のデータとして扱った。

まず、コピュラ文がトピック コメント構造の文であることから、分析の手がかり的指標として、Givón(1983)によって提示された「参照距離(RD)」と「トピックの維持(P)」を用いた。「参照距離」というのは、そのトピックがどのくらい前の文脈に出現していたかを示し、本研究では文の数でカウントした。「トピックの維持」は、どのくらいそのトピックが続くかを示し、同じく文単位でカウントした。これはトピックの重要性の指標となる。この2つの指標は、類型論的にさまざまな言語のトピック文の談話機能分析に適用されている。

次に、コピュラ文の発話者に対して、聞き手がどのような内容で反応しているか、質的に分析を行った。

5. 結果

5.1 産出されたコピュラ文の型

コピュラ文は、日本語学習者に46例、日本語母語話者に31例見られた。日本語学習者は日本語母語話者の約1.5倍の頻度でコピュラ文を産出している。

次に産出されたコピュラの型であるが、同じ指標を用いて分析した遠山(2011 予定)では、日本語のコミックから「だ」の有無と終助詞の有無を組み合わせる4つの型のコピュラ文を抽出していたが、本研究のデータからは、「その他」を含めた以下の5つの型が抽出された。

- (1) 「コピュラ + 」型(「だ/です(コピュラ)」がなく、文末に何もつかない型)

例 1 読み方は「ワルツ」(話者 1)

(2) 「コピュラ + 終助詞」型

例 2 あ、BKC はそこか (話者 5)

(3) 「コピュラ (だ/です) + 」型

例 3 スウェーデンはほんとに幸せな国です h (話者 1)

(4) 「コピュラ (だ/です) + 終助詞」型

例 4 あの、元、台湾は元ですよ (話者 5)

(5) その他

例 5 謝る時は、こう七十度とか (話者 2)

(1)~(5)の型の日本語学習者と日本語母語話者の型別産出頻度は図 2 の通りである。日本語学習者、日本語母語話者ともに(1)の「コピュラ + 」型の頻度が圧倒的に高く、日本語母語話者(NNS)では 80%、日本語母語話者(NS)では 72%を占める。(1)は文末が名詞の言い切りで、コピュラ(だ/です)で終了しないため、話し手の断定作用のない型である。特に目立ったのは、「日本は 20 歳(話し手 1)」のように解説部分に数値が入る型である。日本語学習者では(1)の 36 例中 14 例(30%)が数値が入る型、日本語母語話者では、(1)の 22 例中 7 例(32%)が数値の入る型であり、どちらも(1)の型の中で占める割合が高い。

また「その他」のみ日本語母語話者に多く見られた。具体的には、日本語学習者には「って」という引用形式、「～じゃないんですか」という反問形式、途中で日本語母語話者が引き取った形式(接続助詞を使用)が見られた。日本語母語話者には、「っていうか」、「～だと」、「っていうんかあ」のような引用を用いた形式、「だったので」という過去の形+接続助詞、「みたいな」や「とか」のような例示する文末形式が見られた。

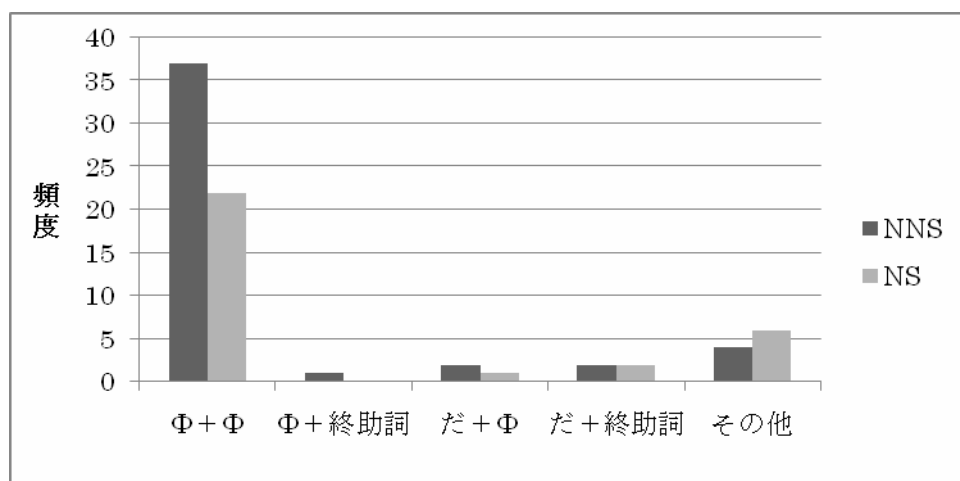


図 2 日本語学習者(NNS)と日本語母語話者(NS)によるコピュラ型別頻度

5.2 談話スキーマ

今回のデータでは、(2)~(5)の型は頻度が0~2と低く、スキーマ抽出には無理がある。参考程度にとどめ、主に(1)の「コピュラ + 」型の談話の分析を行った。

5.2.1 参照距離(RD)とトピックの維持(P)による分析

「コピュラ + 」型のコピュラ文が最も多いことから、データの対象者たちは、自らの判断を断定し主張することなく、情報のみを交わすことが多いと考えられる。

直前の文脈とどの程度連続しているかの指標となる参照距離(RD)は、言語化されていない文脈を参照することになる「なし」と、言語化されているものに分けた。RDが「なし」となるのは、話し手と聞き手が共有しているが、その場ではトピックとして出されてこなかったものを提示するとき用いられる。

表3はRDが「なし」の頻度と割合である。話者1&2、5&6のペアは、両者が同程度の割合で新しいトピックを提示しているが、話者3&4、7&8のペアは、学習者が新しいトピックを提示する傾向があり、母語話者は提示しない傾向があると考えられる。また、RDとPの値の解釈の仕方は、Givon(1983)によると、表4ようになる。話者5&6のペアを除き、ほとんどがRDもPも低い値を示す連鎖終了のパターンであった。

学習者と母語話者の違いとして、RDが「なし」でPが0値の割合という連鎖の終了を示すコピュラ文は、学習者で43%、母語話者で18%であった。RDが「なし」という概念はGivonの表には現れていないが、それまで言語化されていないトピックを導入するきっかけづくりのような発話となっている。

表3 RDが「なし」の頻度と割合

話者	頻度	割合
1	10	56
2	2	67
3	3	75
4	0	0
5	3	30
6	4	29
7	5	83
8	0	0
9	1	50
10	0	0

表4 参照距離(RD)とトピック維持(P)と談話におけるトピックの位置

段落内のトピックの位置	参照距離(RD)の値	トピックの維持(P)の値
連鎖開始 Chain initial	高い(連続性が低い)	高い(連続性が高い)
連鎖中間 Chain medial	低い(連続性が高い)	中程度(連続性は中程度)
連鎖終了 Chain final	低い(連続性が高い)	低い(連続性が低い)

(Givón1983:15 訳は筆者)

5.2.2 質的分析

前節で見られたように、学習者はテーマに沿って、それまで導入されていないトピックを新しく導入するきっかけとしてコピュラ文を使用している傾向がある。聞き手の日本語母語話者はその情報に同意したり、確認したりしながら話し手の言いたいことを促していく。驚いたり、説明をしたりすることもあるが、相づち程度の応答が多い(例6)。話者5&6のペアは、他のペアと比較してPの値が高く、同じトピックでのやりとりが長く続いているという特徴がある。

例6

NS04 : 北と南のー	
NNS03 : あ、方言	
NS04 : 方言とか、そのーなんか人間性の違いも[ちょっと]	
NNS03 : [あー]全然違い[ます]	
NS04 : [あー]やっぱ違うんですね	
NNS03 : <u>今、私はソウル</u>	
NS04 : <u>あーはいはい</u>	
NNS03 : ソウルに住んでますけど、プサン知って[ますか]	
NS04 : [あーはい]	
NNS03 : 全然違い[ます]	
NS04 : [あー]そう、違うんですね	
NNS03 : なんか XX 日本とー、比べたら、ソウルが東京	

テーマに沿った新情報提示のきっかけ

新しい情報提示

一方、日本語母語話者の「コピュラ + 」型コピュラ文に対して、学習者は、質問をしたり、コメントをしたり、積極的に意味交渉をしている(例7)。全く反対のコメントをすることもある。しかし、話者5と話者6の会話では、会話を重ねるにつれ、学習者(話者5)が母語話者同様、聞き手にまわり、相づち程度の応答をするようになっていく変化が見られた。逆に母語話者(話者6)は、学習者によく見られたようにテーマに沿って新しい情報を導入することが多くなるという変化がみられた(例8)。

例 7

NNS05 : [いやいや]家はまあび、うん琵琶湖、の隣にある	
NS06 : あー	
NNS05 : 遠い	
NS06 : 結構遠いかな	
NNS05 : そう	
NS06 : <u>琵琶湖は自転車でー、3,40分ぐらい、あでもそ んなに遠くない</u>	連鎖中のトピック
NNS05 : <u>めっちゃ遠い</u> hh	反論
NS06 : あーそれぐらいする	
NNS05 : で、 <u>琵琶湖、遠いよ</u> 、ここ XX 衣笠、まあここ	反論繰返し

例 8

(香港でステイしたマンションの話題)	
NS06 : で、 <u>私がでも泊まったところは23階</u>	
NNS05 : <u>うん</u>	あいづち応答
NS06 : 友達	
NNS05 : <u>うん</u>	あいづち応答
NS06 : で、入ると、めっちゃゴージャスなほ、あのマ ンション	
NNS05 : <u>うん[、おおゴージャスマンション、大きいね]</u>	話し手の発話の繰返し
NS06 : [高い、高いマンション、]でも、めっちゃ狭い	
NNS05 : <u>あ、めっちゃ狭い</u>	話し手の発話の繰返し

5.まとめと考察

5.1 コピュラ文の型の比較

コピュラ文の産出は、日本語学習者が日本語母語話者より 1.5 倍ほど多かったが、どちらも断定を主張せずに情報伝達中心の「コピュラ + 」型がほとんどであり、また解説(コメント)部分に数字がくることが多かった。これは、データが普段の日常会話に近いものであり、お互いを知り合うための会話であったことが要因の1つと考えられる。

日本語母語話者に特徴的に見られたのは、「っていうか」、「~だと」、「っていうねんかあ」

のように引用を用いた表現、「みたいな」や「とか」のように例示を用いた表現である。引用表現を用いることにより客観性が、例示表現を用いることにより間接性が前景化し、コピュラ文が本来もつ断定や主張を和らげていると考えられる。曖昧さを前景化したこれらの表現は、現代の若者言葉の文化的特徴を表わしているとも言われており、コピュラ文の文末に限ったことではないと考えられるが、断定調になりがちなコピュラ文を使用する際には有効なレトリックである。学習者の日本滞在期間が長くなり、日本人学生との接触時間が長くなるにつれ、このような表現が産出されるようになるかどうか、文化面も合わせて、今後データを分析していきたい。

5.2 コピュラ文の談話スキーマ

日本語学習者も日本語母語話者も、トピックの導入としてコピュラ文が使用されることが多く、特に日本語学習者は直前に言語化されていないトピックを導入することが多く見られた。これは Hopper(2001)で示された疑似分裂文の談話的機能に類似している。またペアにより、日本語学習者が主にトピックを導入するペアと、学習者と母語話者が同程度トピックを導入するペアが見られた。ペアによっては、来日当初は母語話者の新しい情報提供に対して、意味交渉や確認、反論などを行っていたが、会話を重ねるにつれ、コピュラ文によりトピックを導入した話し手にターンを譲り、自分はいづちや話し手の発話を繰り返すなどして聞き手にまわるといった反応が見られるようになった。「コピュラ + 」型のコピュラ文は、コピュラ(だ/です)を用いていないので情報伝達中心とはいえ、助詞「は」という確信を伝える機能は残っている。そのため、話し手がコピュラ文によってきっかけづくりをした場合、聞き手にはトピックが続く間はターンを譲らせることをアフォードする社会的アフォードンスが潜在的に存在していると考えられる。

5.3 日本語教育への示唆

実際の友達同士の会話では、「N1はN2だ/です」のような、教科書で正しい文法として導入されるコピュラ文ではなく、「N1はN2」という型がほとんどであった。学習者は「N1はN2」の談話上の機能を教えられなくても習得していると考えられるが、逆にいつ「だ」や「です」を使えばいいのかを理解しているかどうかは、産出が少なかったために不明である。「N1はN2」型を多用している母語話者も、自分の立場を明確にしたいときは「いや、僕はこっちです(話者2)」のように断定的に表現している。しかし、このようなインプットが日常会話では少ないことも明らかになった。

コピュラ文は、「です」と「だ」「である」の対立として教えられることが多いが、コピュラを使用しない「N1はN2」型とコピュラを使用する場合の対立を明示的に示すことも必要だろう。

6. 今後の課題

本研究では、Givon(1983)の指標を用いたが、相互行為を分析するにあたり、RDがない場合などテキスト分析とは異なる現象があり、自由会話の指標として再考の余地がある。また終助詞や引用などその他の表現を一括りにして分析を行ったが、当然個々の終助詞や表現にはそれぞれの機能があり、更に詳細なスキーマが抽出される可能性がある。それらの分析を今後の課題としたい。

最後に、本研究で用いた「立命館日本語学習者会話コーパス」は、日本語学習者の発話を、学習者の来日直後から縦断的に採録した貴重な縦断的データ資料である。対象者が比較的レベルの高い学習者であることもあり、今年度は縦断的データの長所を生かすには来日からの在日期间が短かった。コミュニケーションによる習得を観察していくには、今後もデータの採録を続けることにより、縦断的データとしての本コーパスを充実させていき、分析を行っていきたい。

参考文献

- 河野哲也(2006)『<心>はからだの外にある』NHK出版
- 佐々木正人(1994)『アフォーダンス 新しい認知の理論』岩波書店
- 砂川有里子(2005)『文法と談話の接点 - 日本語の談話における主題展開機能の研究』くろしお出版
- 遠山千佳(2011 予定)『発話態度によるトピック連続性のスキーマ コピュラ文を対象に』
『日本語用論学会 第13回大会発表論文集 第6号』日本語用論学会
- 野田尚史(2004)「主題の対照に必要な視点」益岡隆志編『主題の対照』くろしお出版
- 堀江薫(2004)「談話と認知」中村芳久編『認知文法論』大修館書店、247-278.
- 本多啓(2005)『アフォーダンスの認知意味論 生態心理学から見た文法現象』東京大学出版会
- 三尾砂(2003)『三尾砂著作集』ひつじ書房
- 三上章(2002)『構文の研究』くろしお出版
- メイナード・泉子(2000)『情意の言語学 - 「場交渉論」と日本語表現のパトス -』くろしお出版
- Givón, T. (1983a) 'Topic continuity in discourse: An introduction', In T. Givon (ed.), *Topic continuity in discourse: A quantitative cross-language study*, John Benjamins.
- Hopper, P. J. (2001) Grammatical constructions and their discourse origins: prototype or family resemblance?, In M. Pütz, S. Niemeier and R. Dirven (eds.), *Applied cognitive linguistics 1: theory and language acquisition*, Mouton de Gruyter.
- Myhill, J. (1992) *Typological discourse analysis: Quantitative approach to the study of linguistic function*, Blackwell.

Odlin, T. (1989) *Language transfer*, Cambridge University Press.

-
- i アフォーダンス理論そのものは、ジェームス・ギブソンによって完成された(佐々木 1994)とされている。
- ii この機能は、砂川(2005)の「後項焦点文」のものである。砂川は、「～が～だ(前項焦点文、全体焦点文)」と「～は～だ(後項焦点文)」の両者をコピュラ文としている。なお、研究では「～は～だ」のみをコピュラ文と定義する立場をとっている。